

事後評価結果（案）一覧

○ソフト分野

番号	領域	タイプ	研究課題のテーマ名、概要、主な研究成果 (詳細は別紙補足参照)		研究代表者	委託額 (3カ年) (千円)	事後評価意見 (詳細は別紙2 参照)	参考意見 (詳細は別紙2参照)	事後評価 結果(案)
18-1	1	Ⅲ	課題名	道路の整備・維持管理費用、環境費用を考慮した受益者負担の仕組みに関する研究	一橋大学 大学院 教授 根本 敏則	18,160	成果の活用には検討課題が残っているものの、重要な論点として道路の整備・維持管理に対する受益者負担の仕組みを総合的に取りまとめるとともに実務への示唆を与えており、研究目的は概ね達成され、研究成果があったと評価する。	<ul style="list-style-type: none"> 受益者負担により道路のサービスレベルとその維持管理レベルを数値的基礎データとして把握し、ステークホルダーに分かりやすい成果へと高めることを期待する。 課金手法は、課金のコスト、手間、確実性との兼ね合いを合わせて考える必要があるため、今後、それらの研究がされることを期待する。 	B
			概要	道路整備に係わる新しい受益者負担の仕組みを構築するため、諸外国の制度との比較分析、費用・負担の実態整理を行い、より柔軟な有料道路制度、対距離課金の提案を行うことを目的とする研究であった。					
			主な研究成果	<ul style="list-style-type: none"> 対距離課金制度の導入の意味づけの整理 対距離課金による交通需要管理とモデルの構築 対距離課金による道路インフラ最適水準とモデルの構築 欧米における対距離課金の導入事例と動向の整理 					
18-2	2	I	課題名	駐車デポジット制度による受容性と柔軟性の高い都心部自動車流入マネジメント施策の研究と実証	名古屋大学 大学院 教授 森川 高行	52,000	実用化に向けては、課金手法の検証、デポジットシステムの開発などに課題を残すが、PDS という他国にも例のないユニークなコンセプトの可能性を大きく前進させていることから、研究目的は達成され、十分な研究成果があったと評価する。	<ul style="list-style-type: none"> 報告書の個別の章の内容は充実しており、十分な研究成果がみられるが、各章が独立しており、有機的なつながりがやや不足している。各章の分析を総合化し、全体ビジョンを示しておくことを望む。 PDS は、公共交通の結節点において発展してきた中心市街地に配慮しながらプライシングを行うという点できわめてユニークなシステムである。基本的な考え方は整理されたので、改良および実験を重ね本格運用を目指すことを期待する。 課金収入の分配の分析において、交通サービスの向上に向けたネットワーク（ノード）の整備やシステムの導入など、中心部の交通計画に結びつけることを期待する。 	A
			概要	都心部の交通環境を改善するため、ITS を活用して「入域賦課金」と「駐車政策」を組み合わせた、「日本型ロードプライシング」を開発することを目的とする研究であった。					
			主な研究成果	<ul style="list-style-type: none"> ロードプライシングに比べた PDS の受容性の特性の把握 活動・交通行動予測モデルの開発を通じた PDS の交通改善効果の確認 名古屋都心部における社会実験による PDS の実証的影響分析の実施 公平性の観点からみた課金収入の分配方法に関する分析の実施 合意形成に向けた基礎的知見の整理 					

※ 事後評価の基準

A: 研究目的は達成され、十分な研究成果があった B: 研究目的は概ね達成され、研究成果があった C: 研究成果は一部に留まった D: 研究成果があったとは言い難い

○ハード分野

番号	領域	タイプ	研究課題のテーマ名、概要、主な研究成果 (詳細は別紙補足参照)		研究代表者	委託額 (3カ年) (千円)	事後評価意見 (詳細は別紙2 参照)	参考意見 (詳細は別紙2参照)	事後評価 結果(案)
18-3	7	II	課題名	センサーネットワークを利用した次世代型斜面防災システムの構築	立命館大学 防災システム 研究センター 副センター長 深川 良一	65,220	本手法の基本となる間隙水圧に基づく斜面防災メカニズムに対する信頼性に課題が残るとともに、小規模な屋内土壌実験の結果を解析的に再現することに十分成功しているともい難いものの、センサーやモニタリングシステムについては耐候性やコスト縮減等、一定の成果が得られており、研究目的は概ね達成され、研究成果があったと評価する。	<p>研究目的は概ね達成され、研究成果があったと評価するが、上記記載の意見もあり、今後の研究にあたっては、以下の点に留意していただきたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ センサーの配置や密度と検知の精度、将来の電源の耐久性や耐候性など、システムの信頼性や適用性に係る課題は多い。 ・ 本研究が提案するデータ収集手法と斜面安定評価手法とが、従来の雨量指標等による斜面崩壊予測手法よりも、警報の精度を高めることを確認または期待させる研究成果が示されていない。 ・ 現地での計測・実験を継続し、機器の高信頼化・耐候性の向上、省エネ化などを一層進めることにより、実用性を高めるフォローアップが重要。 	B
			概要	限られた資源で斜面崩壊を予知し災害を未然に防ぐため、センサー技術、情報通信技術、地盤工学を用いて、低コスト、運用の容易さ、高い信頼性、斜面状況の監視精度向上が実現可能な斜面防災機器・システムの開発を行うことを目的とする研究であった。					
			主な研究成果	<ul style="list-style-type: none"> ・ 斜面防災システムの効率的な実施と運用（イニシャルコスト、ランニングコストの削減） ・ 急斜面など従来型防災設備の設置やメンテナンスが困難な場所への対策（運用の容易化） ・ センサー、通信システムの対候性や避雷性の向上（システムの信頼性の向上） ・ 点的な計測から面的な計測による斜面状況の監視精度向上（網羅的監視） 					

※ 事後評価の基準

A: 研究目的は達成され、十分な研究成果があった B: 研究目的は概ね達成され、研究成果があった C: 研究成果は一部に留まった D: 研究成果があったとは言い難い